

第27回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会が2011年6月、大阪市で開かれた。第1シンポジウム「皮膚を見て、全身を診る：皮膚科医の役割再考」では、皮膚症状から潜在疾患を見抜く、皮膚科エキスパートならではの診療のポイントが多数紹介された。ここではとくに、「皮膚は内臓の鏡」であることを再考させられる3題について、皮膚科医以外の日常臨床にも役立つ内容にしぼって紹介する。

(構成・木村 薫=科学ジャーナリスト)

# デルマドロームの歴史的変遷と今日的意義



三橋善比古  
東京医科大学皮膚科 教授

デルマドロームとは「全身疾患と関連して生じる皮膚病変」を意味する用語である。用語は外国生まれだが、日本の皮膚科で進化した特異な概念である。本稿では、デルマドロームの典型例を提示し、デルマドロームの歴史を概説する。

皮膚科教科書に記載され、医師国家試験でもしばしば取り上げられる。しかし、欧米の教科書に記載はなく、PubMedで論文検索をしても、日本人の論文が8編収録されているのみで、日本人以外の論文はない(2011年7月現在)。では、この用語はだれが考え出し

たのかというと、日本人ではなく、米国人のKurt Wienerである。

## WienerのDermadromes

Dermadromesは1947年のWienerの著書、“Skin manifestations of

### デルマドロームとは……

症例1は、皮膚筋炎が肺小細胞がん発見の契機になった。皮膚筋炎は肺がんと関連して生じたものと考えられる。肺がんは治療によって一時仕事に復帰できるまでに軽快した(その後、再発)。症例2は、腎盂がんに黒色表皮腫を合併した例である。

これらのように、全身疾患と関連して現れる皮膚病変をデルマドロームと呼ぶ。デルマドロームから全身疾患の存在を推測することができる。主なデルマドロームを表にまとめた。

デルマドロームは日本のほとんどの

表 代表的デルマドロームと合併疾患

デルマドローム	合併疾患
皮膚筋炎	肺がん、胃がん
Bazex症候群	喉咽頭がん、食道がん、上気道扁平上皮がん
黒色表皮腫	胃腺がん、腎がん
Leser-Trelat徴候	胃腺がん
Sweet病	白血病、骨髄異形性症候群
腫瘍随伴性天疱瘡	悪性リンパ腫、キャスルマン病
後天性魚鱗癬	悪性リンパ腫
壊死性遊走性紅斑	グルカゴノーマ
環状紅斑	シェーグレン症候群
後天性毳毛性多毛症	肺がん、消化器がん
壊疽性膿皮症	潰瘍性大腸炎、クローン病、大動脈炎症候群
汎発性帯状疱疹	HIV感染、免疫不全、悪性腫瘍
浮腫性硬化症	糖尿病

internal disorders (Dermadromes)” (図5)で初めて使われた。皮膚を意味する derma と症候群を表す syndrome を合成したものである。Wiener は、医師たる者は、全身疾患と皮膚症状の關係に注目すべきであると述べている。

この著書を読むと、全身疾患の時に現れる皮膚病変すべてを dermadromes と呼んでいる。すなわち、Wiener の dermadromes は、全身

疾患を持つ患者に生じる皮膚病変をすべて網羅するものである。これは、現在の我々のデルマドロームの概念とは異なる。

日本では、皮膚症状のうち、特に診断に役立つもののみをデルマドロームと呼ぶ。しかし、全身疾患と関連して生じる皮膚病変を記載する場合、役立つか役立つかないかで分けることは難しい。すなわち、日本で用いられている

デルマドロームの概念はファジーなものであり、正確に定義することは難しい。

実際、現在の欧米では dermadromes の語は使われず、skin manifestations of internal disorders という表現になっている。すべての皮膚症状を指すのであれば dermadromes と呼ぶ意味がなくなる。このことが、欧米でこの語が使われていない理由と考える。

<症例1> 66歳、女性

**主訴** 顔面・体幹・四肢の紅斑、全身倦怠感。

**現病歴** 3カ月前から、顔面と体幹、および四肢に痒みを伴う紅斑が出現。2週間前から、四肢の筋肉痛と全身倦怠感も認めたので受診した。

**初診時現症** 両側上眼瞼に紅斑と浮腫を認めた。体幹と四肢に左右対称性の紅斑を認め、一部に、掻破痕に一致した線状の紅斑も見られた(図1)。両手背と指背にも紅斑を認め、爪上皮の延長と点状出血が見られた(図2)。

**主な血液検査結果** WBC 4700/ $\mu$ L、CPK 1404U/L、赤沈38mm/1h、CRP 0.4mg/dL、抗核抗体 80倍、抗Jo-1抗体 < 7U/mL、抗RNP抗体 < 7U/mL。

**主な検査所見** 胸部Xpで右上葉に結節性陰影を認めた。CTでも胸部Xpと同様、右上葉に結節が見られ(図3)、その他、右鎖骨上窩、肺門部、縦隔、右鼠径リンパ節、肝臓S8領域に転移性

病変を認めた。右鎖骨上窩リンパ節の生検病理組織は、肺小細胞がんの転移の像であった。また、筋生検で筋線維の炎症像を認めた。

**診断と治療、および経過** 皮膚筋炎と肺小細胞がん(Stage IV)と診断して、化学療法とプレドニゾン内服を行った。肺の腫瘍と転移巣は縮小して筋痛

と筋力低下も改善した。その結果、歩行も可能となった。皮膚の紅斑も著明に改善し、退院してもとの仕事に復帰した。しかし、肺がんはその後再発した。

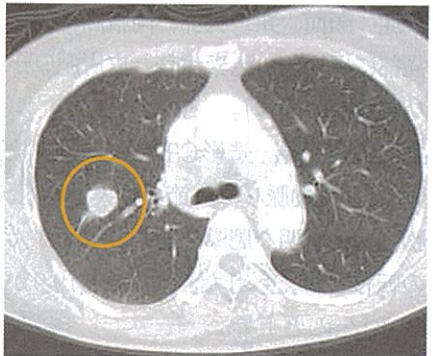
図1 前胸部と腹部の紅斑



図2 右手指背の紅斑と爪上皮延長



図3 治療前の胸部CT



右肺上葉に結節を認める。

## 日本のデルマドローム

日本でのデルマドロームは、全身疾患で出現するすべての皮膚症状を指すものではない。特別な場合に限って使われる。

特別な場合とは、「役に立つ」とか、「意外だ」という時である。例えば、全身性エリテマトーデス (SLE; systemic lupus erythematosus) で見られる顔面の蝶形紅斑はデルマドロームではないが、シェーグレン症候群の環状紅斑はデルマドロームと呼ぶ人

が多い。蝶形紅斑は広く知られたSLEの皮膚症状であり意外性はないが、環状紅斑がシェーグレン症候群診断の手掛かりになれば意外性がある。しかし、蝶形紅斑はSLEの診断に役立つ皮膚病変であり、デルマドロームと呼んでも間違いではない。このように日本でのデルマドロームの範囲はファジーである。

デルマドロームは外国生まれであるが、日本の皮膚科学が育ててきた概念である。Wienerのdermadromesの趣旨、すなわち、全身疾患と皮膚病変の關係に注目するという考えは、日本で

はデルマドロームとして受け継がれ、発展してきたのである。

## 皮膚病変は重要な診断情報

皮膚は内臓の鏡である。全身に起っている病態の一部として皮膚に症状が現れることがある。デルマドロームとは、全身疾患と関係して生じる皮膚病変のうち、特に診断に役立つものと言う。この皮膚病変の情報を活用しない手はない。

皮膚に現れた一見些細な病変が、隠された悪性腫瘍や代謝性疾患、感染症の診断に役立つことがある。皮膚所見を読むのに高価な機器は必要ない。したがって医療費の削減にもなる。皮膚所見を、そして皮膚科医を多いに活用していただきたいものである。MM

### <症例2> 78歳、男性

**主訴** 顔面、頸・胸部、四肢の色素沈着。

**既往歴** 初診の3年前、右腎盂がんのため、右腎摘出術および放射線療法を受けた。

**現病歴** 右腎摘出術後から、顔面と両腋窩、四肢に黒褐色の色素沈着と皮膚肥厚が出現。皮疹が徐々に増悪したので受診した。

**現症** 顔面、頸・胸部、両腋窩、両鼠径部に黒褐色の色素沈着と皮膚肥厚が見られた (図4)。

**主な検査所見** 造影CTによる全身検索で、傍大動脈リンパ節の腫大と壊死、膀胱壁の著明な肥厚を認め、腎盂がんの転移と考えられた。血清CA19-9が62.9U/mLと上昇。

**診断と治療、および経過** 腎盂がん

(Stage IV) に合併した悪性黒色表皮腫と診断した。皮疹の一部に活性型ビタミンD<sub>3</sub>の外用を行ったところ改善を認めた。

図4 顔面と頸部の黒褐色色素沈着と皮膚肥厚

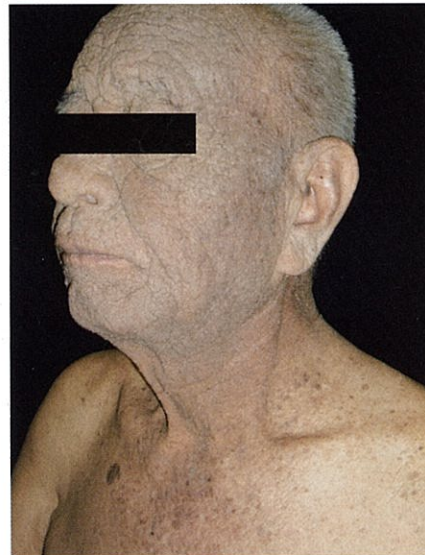
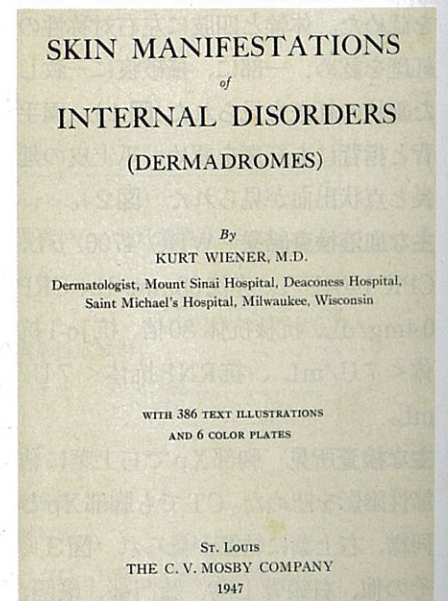


図5 WienerのDermadromesの原著



Wienerの原著は久木田淳先生 (東京大学名誉教授)、上出良一・東京慈恵会医科大学教授より貸与していただいた。両先生に深謝申し上げます。